

1 心臓超音波検査が左室内血栓の診断、治
2 療効果判定に有用であった Churg-Strauss 症候群の
3 一例
4

5 梅津華織 後藤光 小川優 山本祐子 林真希 木村
6 豊(帝京大学ちば総合医療センター検査部) 中村文
7 隆(帝京大学ちば総合医療センター第三内科)
8

9 【はじめに】Churg-Strauss 症候群(以下 CSS)は先
10 行するアレルギー性疾患から中血管の壊死性炎症を
11 発症する血管炎症候群の一つで末梢血の好酸球増多
12 を伴う。好酸球増多は様々な臓器障害を引き起こし、
13 心臓に障害を引き起こした場合は心室内血栓を形成
14 する事があると知られている。今回、CSS 患者に形
15 成された左室内血栓を長期間にわたり経過したので
16 報告する。

17 【症例】54 歳男性。急速に進行する認知機能の低下
18 を訴え来院。精査入院し、入院時採血で著明な好酸
19 球増多を認めた。好酸球増多による心臓障害の検索
20 のため行った心臓超音波では、左室中部から心尖部
21 にかけて全周性の壁肥厚が認められた。肥厚した左室
22 内膜面には高輝度層を認め、左室内血栓が疑われた。
23 また、左室駆出率は 60%であり、左室収縮能の低下
24 は認められなかった。確認のため心臓 MRI 検査を施
25 行したが、心筋の浮腫性肥厚や炎症性の肥厚は認め
26 られたものの左室内の血栓は検出されなかった。後
27 日、経過観察目的で施行した心臓超音波では左室内
28 の高輝度層は心内膜から一部剥離が認められた。超
29 音波検査の結果より左室内血栓と診断され、抗凝固
30 療法が開始された。抗凝固療法後、左室内血栓はし
31 だいに縮小した。CSS による認知機能の低下もステ
32 ロイド治療で軽快し退院となった。また、左室内血
33 栓による塞栓症は認められなかった。退院後も当セ
34 ンターで経過観察中である。

35 【まとめ】今回超音波検査によって血栓が疑われた
36 ことから、治療方針決定の判断材料となることが出
37 来た。さらに、経過観察により治療効果の判定にも
38 有用な症例であった。